

中国語の指示代詞“这”“那”の虚化について

高 芑

0. はじめに

現代中国語の指示代詞¹の用法について、まず挙げられるのは代用機能であり、もう一つは指示機能である²。

- a. **这是书**，**那是报**。(代用機能)
[これは本であり、あれは新聞である。]
- b. 桌子上放着一枝**笔**，**那是妈妈送给我的生日礼物**。(指示機能)
[机の上にペンがおいてある。それは母がくれた誕生日プレゼントです。]

例 a の“这”と“那”はそれぞれ本(书)と新聞(报)を代用し、例 b の“那”は机の上においてあるペン(笔)を指している。例 a、b のような指示代詞“这”“那”の代用機能と指示機能がよく見られる一方、“这”“那”によるその他の機能もしばしば見られる。表現例 (1)、(2) を見てみよう。

- (1) 塑料底的棉鞋一走一滑，很想此时有人出来主持**讲和**，可**围观**的小孩都不吭声都不是真哥们。我想振作一点，既然来了，跑，又**丢不起这人**——就表现好一点。 《看》

[底がプラスチック製の綿靴なので、歩こうとすると滑ってしまう。そのとき、誰かでてきて仲裁してくれればと思ったが、野次馬の子供たちは誰一人として声を出さなかった、本当の仲間じゃなかったんだ。勇気を奮い起こそうと僕は考え直した。すでに来た以上、逃げたりして恥をかくことなんて自分自身でも許せないし、もっといい振る舞いを見せなきゃ。]

- (2) 将来自个**过日子**了，**那一分钱**都得**掰着齿花**，要不**怎么置大件儿**? (张伯江・方梅 1995: 149)

[そのうち、独立して生活するようになったら、一円でも細かく分けて使うようにしなくては。そうでなければ、家電製品などをどうやってそろえるんだ。]

表現例（1）“丢不起这人”の指示代詞“这”と表現例（2）“那一分钱”の指示代詞“那”について適当な日本語の訳が見当たらず、また指示代詞用法における指示機能と代用機能のいずれにも当てはまらない。

本稿は、このような指示代詞における指示・代用機能以外の用法について考察する。

1. 比喻に現れる指示代詞

1.1 比喻とは

比喻には直喩、隱喩、換喩、提喩などが含まれるが、本稿で扱う喩は、直喩に限る。まず表現例cとdを見てみよう。

c. 花子は美しい。

d. 花子はバラの花のようだ。 (佐藤2004：49－50)

佐藤2004は「例えば太郎が恋人の花子について、c と言うならば、そういう表現は平常文と呼ばれてよい。それに対して、もし彼が、d と言ったとすれば、その文は「直喩」というフィギュール³によってあやどられている」と説明している。このように、物事の様子を表現するとき用いる「XはYのようだ」の表現は、中国語では「X像Y那样（形容詞）」（d. “花子像玫瑰花那样美”）と表現する。花子の美しさは聞き手にとっては未知なことであり、話し手と聞き手の間で共有されにくい性質のものである。喩を用いることによって、もともと話し手の側だけに属する情報を聞き手と共有することになり、バラの美しさを利用して聞き手に花子の美しさを想像させ、互いに共感意識を持つようになる。このように、聞き手の側にとっては、たとえ未知の情報で理解しにくい内容であっても、適切な喩というフィギュールによって、聞き手はすっきりと理解することができる。

1.2 喩に現れる指示表現

現代中国語においても、1.1 節のような指示表現を伴う喩はしばしば見られる。

(3) 他的死就好像日出日落那样地确定。 《雾》

[彼の死は日の出、日の入りのように確実である。]

(4) 字句从我的自来水笔下面写出来，就像水从喷泉里冒出来那样地自然容

易。

《雾》

[表現の文言は私の万年筆から湧き出た、まるで水が噴水から湧き出るように自然にたやすかった。]

- (5) 现在这艰辛地挣扎着穿出巫峡的长江，就好像是她过去生活的象征，而她的将来生活也该像夔门以下的长江那样的浩荡奔放罢！

《虹》

[懸命にもがいて巫峡を突き抜け出た長江は、これまでの彼女の生活を象徴しているかのようであった。そしてまた、これからの彼女の生活も夔門下流の滔滔たる長江の流れのようであろう。]

比喩に用いられている参照物は、指示対象と似た性質を持つため、ここでは間接的指示対象と呼ぶことにする。この間接的指示対象の同定は指示対象と同様に見てよい。指示対象が五感で認識することができる場合、指示用法の現場指示とみなす。表現例(3)の“日出日落”は自然現象であり、日の出と日の入りを同時に見ることは通常不可能である。また、表現例(5)では発話者の目の前に巫峡を突き抜け出た長江が流れているため、それと同時に夔門から出た長江を見られることも有り得ない(夔門は瞿塘峡に位置し、瞿塘峡は巫峡の上流に位置する)。これらの間接的指示対象が発話時に現れない限り現場指示には成り得ない。従って、“那么／那样”を“这么／这样”に置き換えることは不可能である。ここで注目されることは、表現例(3)、(4)、(5)に現れている指示代詞“那样”は、いずれも非指示代詞の“一样”に置き換えることができるのである。

1.3 比喩と指示代詞との関係

高芑2004では比喩表現を用いる表現例を収集し、インフォーマント調査をした結果、比喩表現と指示代詞の“那么／那样”とは密接な関係にあることを指摘している。

中国語の指示代名詞の“这”系は常に現場指示に用いられ、特定されている指示対象を指示する働きをしている。これに対し、“那”系は非特定の指示対象をも指示する。比喩表現に現れる間接的指示対象は通常特定されにくいため、指示対象の特徴を表現する場合には“那”系が用いられると考えられる。

(高芑2004 : 23)

1.2節で述べたように、指示代詞の“那么／那样”を“一样”に置き換えることができるにもかかわらず、比喩表現において、指示代詞の“那么／那样”が多用されることから、“这”“那”の指示と代用の機能の変異し、その二つの機能が弱化しつつあることを見てとることができる。

2. 指示代詞における虚化現象

2.1 指示代詞の虚化現象に関する先行研究

指示代詞の虚化現象について、呂叔湘1985は

“在这和那并不对举的时候，这的近指性和那的远指性都会弱化而近于中性。”

“名词本身已经有定，无需指别的情况，例如这个名词是泛指同类事物的，或是那个事物本质上只有一个或是此时此地只有一个的，在这种情况下，别种语言往往有加用‘有定冠词’的，在古代汉语里很少这种用例，近代也还是常常不加用什么字。……但是也常常加用这或那，我们不妨称这个是冠词性的。”

(二重下線は筆者による)

と指摘している。即ち、文脈指示における前方照応の場合、指示代詞が指す先行詞はすでに定であり、指示をしたり、区別したりする必要のない時、指示代詞“这”“那”がもつ意味合いも次第に虚化し、他の言語に見られる定冠詞の働きと同じようにみなすことができるのである。

2.2 指示代詞は総称的なマーカーに

張伯江・方梅1995は北京方言における指示代詞の“这”“那”の虚化現象について、通常は、

“这、那”＋名詞 → ある文脈の中の1つ或いはいくつかの個体を指す
→ 特定指示 (individual)

であるのに対し、場合によって

“这、那”＋名詞 → ある種の人或いは事物を指す
→ 総称的な指示 (generic)⁴

となることがあるとしている。例えば、

(6) 李阿姨……沏了一缸子热茶，端着那个印有“最可爱的人”字样的志

愿军水缸慢慢踱过室内。

《看》

[李おばさんは熱いお茶を瑠璃びきのマグカップに入れた。そして、「最も愛するべき人」と描いてあるその義勇軍用マグカップを持って、ゆっくりと室内を歩いていた。]

- (7) 这老婆我还有一比，好比手里这烟。这烟对身体有害是谁都知道的，为什么还有那么多人抽？

(张伯江・方梅1995：149)

[女房というものには、俺には一つのたとえがあるんだ。それは手に持っているこのタバコのようなもんだ。タバコというものは体によくないのは誰でも知っているが、どうしてあんなたくさんの人が吸っているんだい。]

- (8) “什么东西！哪有点机器人的样子，快赶上我们胡同里那些脏妞儿了。”
“看来这机器人要学坏，比人速度不慢。” (同上)

[「なにそれ！ロボットなんてなってないわよ。うちの近くの横町にうろうろしているああいう連中みたい。」

「まあ、ロボットというものが悪いことを覚えるのは人並みのようだ。」]

表現例 (6) の“那个”は李おばさんの手にしている“缸子”を同定している。一方、表現例 (7) の“这”は誰かの“老婆”（女房）を同定するのではなく、“老婆”全体を指している。表現例 (8) の“这”も特定の“机器人”（ロボット）を同定するのではなく、“机器人”と称するすべてのものを指している。表現例 (7)、(8) の“老婆”と“机器人”は総称的であるため、表現例 (6) の“缸子”とは異なり、指示代詞を用い指示対象を同定する必要がないのである。従って、表現例 (7)、(8) の指示代詞“这”における指示の機能は弱くなり、総称的なマーカーに虚化されている。指示代詞“这”を用いることによって、話題の焦点を“这”の後にくるNP [(7) の“老婆”、(8) の“机器人”] に移転させ、聞き手の注目を引く働きを果たしているのである。

2.3 性質・状態の程度を表わす指示代詞

2.1節では指示代詞の指示機能が次第に弱くなり、総称的なマーカーに虚化されることを述べてきた。ここでは程度を表わす指示代詞を見ていくこととする。

吕叔湘1985は“指示性状的程度，通常用这么和那么，但间或也有就用这和那的，往往有夸张的语气”と述べ、次の表現例を取り上げている。

e. 叫的桂姨那甜

[桂おばさん、桂おばさんと呼んでいて、話がなかなかうまかった]

f. 怎么睡的这死呀

[どうしてこんなにぐっすり寝込んでいるの]

g. 亏你活了这大年纪

[よくもいい年になって]

张伯江・方梅1995：150、151は現代中国語の北京方言において、性質・状態の程度を表わす“这”“那”の用法は極めて固定していると指摘し、次の表現例を挙げている。

(9) 明明吵嘴哭了，大妈一进来，又装没事人。都不知道你什么时候擦的泪，那熟练那专业。

[明らかに口喧嘩をして泣いていたのに、おばさまが入ってきたら、まるで何もなかったようなふりをして、あなたがいつ涙を拭いたのかも分からなかったわ。よく慣れたもので、プロみたいだ。]

(10) 你那儿一天给她打好几次，一打就聊个没完，那腻—你怎么会不记得呢？

[その時あなたは一日中彼女に何回も電話をかけていたでしょう。電話が一旦繋がったら、キリがなくいつまでもしゃべり続けていたのよ。あんなに彼女とべったりだったのに、覚えてないはずはないわ。]

表現例(9)の“那熟练那专业”の“那”は“熟练・专业”の程度を表わし、それ以上はないことを意味する。表現例(10)“那腻”の“那”は長電話をしている二人の様子は人から見ると嫌になるほどべったりした様子を強調している。

张伯江・方梅1996の指摘に基づき、表現例(9)、(10)のような指示代詞の“那”の用法については、次のようにまとめることができよう。

① “这、那”を用いるフレーズのストレスアクセントは“这(zhè)、那(nà)”に置かれる。

② “这、那”が形容詞の前に置かれ、「“这、那”+形」は名詞の修飾

成分になることはなく、述語にしかなることができない。また、この場合、“这、那”を“这么、那么”に置き換えることはできない。

③この用法における“这、那”の使用頻度は、“那”の方がより高い。

性質・状態の程度を表わす“这”“那”について、张伯江・方梅1995と吕叔湘1985とには見解の相違が見られるが⁵、“这”“那”の指示機能が弱化し、虚化しつつあるという点においては一致している。

次の表現例(11)、(12)、(13)に用いられている指示代詞にも虚化の傾向が見られる。その根拠は、これらの表現例に用いられる指示代詞はいずれも省略することができるからである。指示代詞を省略すると、表現例(11)は“他十分信任住在自己身体里的叫‘我’的孩子”、表現例(12)は“陈北燕也笑了，坚持她象征性的坐着的姿态”、表現例(13)は“画了一二三四，再凭想像去添五六七八”となり、指示代詞による同定すべき指示対象がないことにより、何ら支障は生じない。

(11) 方枪枪知道自己眼睛后面还有一双眼睛。他十分信任住在自己身体里的那个叫“我”的孩子。 《看》

[方枪枪は自分の目の後ろにもう二つの目があることを知っている。彼は自分の体の中に存在しているもう一人の“僕”のことを十分信じているのだ。]

(12) 全班同学都觉得有趣，一片笑声。陈北燕也笑了，坚持她那个象征性的坐着的姿态。 《看》

[クラス全員が面白がって、笑い声が響いた。陳北燕も笑った。彼女は自分のシンボルとなっている座りかたを保ちながら。]

(13) 画面孔这事很有趣，每位先生的面孔都有好多“事情”。画了这位的一二三四，再凭想像去添五六七八。不到几天，每位先生都画遍了。

《你》

[人の顔を描くのはとても面白いことだ。すべての先生の顔にはたくさんのお話が隠れている。一二三四を描いたら、また想像に任せて五六七八を描き添える。何日もかからないうちに、すべての先生の顔を一通り描き終えた。]

このような指示代詞の使用は、正式な文章や論文などには見られず、主に小説やエッセイなどに見られる。従って、このような指示代詞の使用は、指示対象を同定するためではなく、文章に彩を添えるための一種のレトリック

と見ることができよう。

3. 指示・代用機能の弱化した指示代詞

3.1 “这”系

3.1.1 結果を表すマーカとなる“这下”

牟云峰2005は文章中に現れる“这下”の語源、用法などについて詳しく述べている。具体的に表現例を見てみよう。

- (14) 妇人正手里拿着叉竿放帘子，忽被一阵风将叉竿刮倒，妇人手擎不牢，不端不正却打在那人头上……(西门庆)却从这武大门前经过，不想撞了这一下在头上。 《金》明代

[女の人が竿を持って簾を支えようとしているところに、突然一陣の風が吹き竿を倒した。女の方は竿を支えきれず、その人の頭を打ってしまった……その時、西門慶はたまたま武大の家の前を通りかかり、計らずもその竿に頭を立たれてしまった。]

- (15) 说的伯爵急了，走起来把金钏儿头上打了一下，说道：“紧自常二那天杀的韶叨，还禁的你这小淫妇儿来插嘴插舌！”不想这一下打重了，把金钏儿疼的要命的，又不敢哭… 《金》明代

[話を聞いていた伯爵は焦りだして、金釧に近づき金釧の頭を叩いて「あのバカ常二に言われるのはもうたくさん、お前に口を挟まれるなんて耐えられるもんか」と言った。その一叩きは力が入りすぎたようで、叩かれた金釧は痛くて仕方がないが、泣くことも我慢をしなければならなかった…]

- (16) 地方大吏飞章入奏请帑，并请拣发知县十二员到工差遣委用。这一下，又把这老爷打在候补候选的里头挑上了。 《儿》清代

[地方の重責にある官吏が捺印をもらいに走って入り、県知事十二人が公務出張するように頼んだ。そこで、あの旦那様が再び候補者として選ばれてしまった。]

- (17) 翟买办道：“你这说的都是甚么话！票子传著，倒要去；帖子请著，倒不去！这下是不识抬举了！” 《儒》清代

[翟買弁は『あなたは何を言っているんだ？ 召喚状で呼ばれたら行こうとするのに、招待状で呼ばれたら、敢えて行かないなんて。ほんとうにこちらの好意を無にしているな！』と云った。]

(以上は牟云峰2005：150で取り上げられた表現例、下線等の記号は筆者

による)

“这下”の“下”は動量詞の“下”からきたもので、“这下”はもともと前文照応の指示機能を果たしていると同時に、先行文脈に現れる動作の量を表わしている。表現例(14)“这一下子”の“这”は文脈指示の前方照応となり、“一下子”は“打在头上”の一回の動作を指している。このように、“这下”に同定される指示対象は《金瓶梅》においては、主に動作に関連している。“这下”の文法化に伴って、“下”の動量詞の意味は次第に曖昧になり、それに照応する動詞句も次第に消滅していった。表現例(16)、(17)で見当たらないのはそのためである。このように、“这下”は具体的な動作を同定することから、一つの事がらを同定するように変化していったのである。時代が、明→清→近現代を下るにつれて、“这下”に同定される事がらには、動量詞“下”と結びつく動詞がほとんど見られなくなり、“这下”の位置も文中から文頭に移り、先行の事がらを同定する“这下”は次第に事がらによる結果を表わすマーカーとなっていったのである。“这下”に関する文法化の過程は以下のとおりである。

動作を同定する／動量を表す → 事がらを同定する → 結果を表わすマーカー

- (18) 从门口折了回来，坐到了我们对面的那张铺上。这下我看清了她的脸，还算秀气……
《我》

[その女の子はドアのところから引き返ってきて、私たちの向かい側のベッドに腰を下ろした。そこで、彼女の顔がはっきり見えた。まあ目鼻だちがすっきりした顔といえるだろう…]

- (19) 左边出事了，人们纷纷站起往左边拥，影院里本来就黑，这下乱成了一锅粥。
《零》

[左のほうに揉め事が起こったので、人々は相次いで立ち上がり押し合い左の方へ行った。映画館の中はもともと暗いので、一層がやがやした。]

表現例(18)は女の子が腰を下ろしたことにより、彼女の顔立ちがはっきりと見える様子を表しており、表現例(19)は暗い映画館の中でトラブルが起き、人々がトラブルの起きた方に集まっていくことにより、映画館がさらに

騒然となっていく様子を表している。表現例(18)、(19)は結果を表わす文法化した“这下”の典型的な表現例といえよう。

3.1.2 “这”による話題の焦点の移転

高芑 2004 は「人称代名詞(主に一人称と二人称)+“这个”+NP」構文の特徴として以下のように述べた。

語用論において、近称指示代名詞“这个”によって構成される「人称代名詞+“这个”+NP」の形式は、話し手が話の焦点を“NP”のほうに移し、聞き手の関心を引き寄せる⁶働きを積極的に果たしており、“那个”に置き換えることはできない。

(高芑2004: 47)

- (20) 王安福向他的子侄们说：“务必把那些坏蛋们打回去，不要叫人家来刷了我这个干老汉”。 《李》

[王安福は自分の甥たちに「必ずあの連中を追い払ってくれ。このわしがやつらに殺されないようにな」と言った。

- (21) 王说：“我这个庸人又有种见解，太平年月比乱世要好。这两种时代的区别比新鲜空气和臭屎的区别还要大。” 《难》

[王は「この凡人の僕はもう一つの見解を持っている。即ち、乱世より治世のほうがいい。その二つの時代の違いは新鮮な空気と臭い糞との違いよりも大きい」と言った。]

表現例(20)の“我这个干老汉”と表現例(21)の“我这个庸人”はともに「我+这个+NP」の形であり、“我”=NPである。このような重複指示のフレーズは現代中国語の小説や日常会話によく用いられる。前述のように、この場合の指示代詞の使用は、指示対象を同定する働きを果しているというより、話題の焦点をNPのほうに移動させる働きを担っている。2で述べてきたことと同様に“这”による話題の焦点の移転も、“这”の虚化と見ることができよう。

3.2 “那”系

3.2.1 比喻表現の“那”の虚化

1.3 節においては比喻と指示代詞との関係を述べた。高芑2004も比喻表現における間接的指示対象は特定されていないものが多いため、指示代詞“那

(那么／那样)”の用いられることを指摘し、比喩表現に指示代詞“那”の用いられる理由はいま一つ考えられる。まず、表現例(22)、(23)を見てみよう。

- (22) 母亲属羊。像羊那么驯服，完全被父亲所“统治”。 《父》
 [母は未年だ。だから、羊のように従順で、父に完全に「支配」されている。]
- (23) 他们就像约齐了似的说，“市面不好，几十年的老店都拖欠半年八个月呢！要是房东们都像你们二老板那样顶真起来，叫一声让房子，那还有什么市面！” 《多》
 [彼らは約束したように口をそろえて、「この頃は不景気だから、何十年もの歴史を持つ老舗でさえ半年くらいの家賃は滞納しているんだぜ。もし大家さんがみんなお宅の二番目のオーナーのように真面目になって出て行けと言ったら、景気の回復なんてとんでもないことになるじゃないかい」と言った。]

表現例(22)の間接的指示対象“羊”がおとなしく、従順であるのは常識として、誰もが知っていることである。表現例(23)の指示対象“你们二老板”の特徴は“大字号”(名高い老舗、話し手)と“收租人老胡”(家賃の取立人胡さん、聞き手)の間で暗黙の了解となっていること(物事に対してすぐに真面目になる)である。これらの間接的指示対象に対するイメージ、或いは認識などはすでに言語外知識として人の頭脳にインプットされているため、指示代詞の指示機能を越えて、一つの固定化した用法であるとして使われているのである。従って、比喩における指示代詞の用法は一つの虚化現象であると見ることができよう。

3.2.2 言い淀みなどの“那”

指示代詞の観念指示について、高苾 2004: 8は『観念指示』には、発話者が知覚している事物を対象として発話するものと、発話者が観念の中に思い浮かべる事物を対象として発話するものと二つある。前者は、知覚可能な事物のみを対象とするが、後者は、知覚可能な事物にとどまらず、知覚不可能なものをも対象とする」と指摘した。

- (24) 他赶紧坐好，……想对瑞丰解释：“那个……”，他找不到与无聊扯淡

相等的话，而只有那种话才能打破僵局。 《四》

[彼はすぐにきちんと座りなおし、…「あれは…」と瑞豊に説明しようとしていたが、適当な世間話のネタが見つからなかった。こういう時、世間話こそが気まずい雰囲気を和らげるものなのだ。]

表現例(24)において、暁荷(“他”)は自分の関係で西院の銭さんが死んでしまったことが気になっており、瑞豊にいいわけをしようとして、指示代詞“那个”を用いている。しかし、前後の文脈を観察してみても、前方照応とする先行詞や後方照応とする指示内容は全く見つからない。このような指示代詞の用法は日本語にも見られる。

(25) 麻原さんは自分が犠牲になるという形で^{あれ}することを考えているんじゃないか。 H8.5.7 テレビ朝日「スーパーサンデー」

この「あれ」は、話し手が過去を回想して独白したり、話し手の中である漠然とした観念を指す観念指示の用法とは異なる。迫田 1993 はこれを「ストラテジー用法」としている。即ち、話し手が言いたい言葉が見つからず、言い淀んだ時に使ったり、言いにくいときに、特に指示する内容もなく、漫然と曖昧に表現内容を指すとき「あれ」の用法である。このような言い淀みの指示代詞“那”の用法は、指示・代用の文法機能から遠く離れ、虚化していると見ることができる。

4. まとめと課題

以上、指示代詞に現れる虚化現象について考察してきた。指示代詞の“这”“那”の使用には、非対称性が存在しているが⁷、指示代詞の虚化現象は“这”系も“那”系のいずれにも見られた。本稿で見てきたように、指示代詞はその指示・代用機能から離れ、文法的なマーカーとして用いられる指示代詞の存在することは明らかである。

この虚化現象は指示代詞に限って見られるものではなく、三人称代名詞にも見ることができる。例えば、

h. 我要喝一扎啤酒。[僕は生ビールが飲みたい。]

i. 我要喝^他一扎啤酒。[僕は生ビールを一杯飲もう]

表現例 i は無指示の三人称代名詞の“他”により、話の焦点を目的語“一扎

啤酒”に移動させ、“干什么”(何をするの)の質問に答え、VO構造が焦点となっているのに対し、表現例 h は“什么”(何を飲む)の「何」に焦点の当てられた質問に答えたものである。

三人称代名詞の代用性が弱くなる現象は、指示代詞の指示・代用機能が弱くなる現象と共通点を有している。三人称代名詞のこの虚化現象の考察は今後の課題とする。

注

- 1 品詞の名称には指示代名詞、指示詞、代名詞などがあるが、本稿では「指示代詞」という名称で統一する。
- 2 朱德熙 1982:85
- 3 常識的な文の代わりに、いささか異質の、ちょっと目立つ表現形式。フィギュールはもともと「姿、かたち、模様」を意味している。レトリック用語としては、姿やかたちのうちでも特に、「常識的な平常表現からいくらか隔たった、目立つ、独特なことばの型」という意味で用いられる。
- 4 张伯江・方梅 1995 は individual を“单指”と称し、generic を“通指”と称している。
- 5 吕叔湘 1985 は、語気を誇張するために、“这么、那么”を“这、那”が用いられると述べている。それに対し、张伯江・方梅 1995 は、“这、那”は“这么、那么”の簡略式であるとは断言できないと述べている。それは、「“这、那”+形」の用法は、それに並行する用法の““这、那”+叫+(一个)+形」との関係が最も密接であるからである。ex. “开头那叫一个亲、快钻一被窝了”(初めのころは1つの布団に入りたいほど親近感もってて仕方がなかったわ)、“里面有好多明朝的口语、骂人骂的那叫生动,地道”(中には明の時代の日常会話がはいっていて、罵りのことばは生き生きとしていて、味があるわよ)。
- 6 望月 1981:197 は[中国語の指示詞は、…聞き手を意識せずに話し手だけで使用が決定できるという意味で、“自己中心性”を持つということができる]と述べている。しかし、赵艳芳 2001 :75 は“发话者的明示(mutual manifestness)总是爱为受话者推理提供一定的相关信息和认知环境。而受话者就是由发话者的明示激活有关的认知语境,努力寻找关联,并进行推理以明白对方的交际意图,获得语境效果。”と述べているように、情報の伝達は必ず発信側と受信側の双方に必要である。
- 7 高芑 2004:29

引用・参考文献

- 吕叔湘 1985 (江蓝生补)《近代汉语指代词》学林出版社
- 牟云峰 2005<篇章中的“这下”>《汉语研究与应用》第三辑 中国社会科学院
- 袁毓林 2003<无指代词“他”的句法语义功能-从韵律句法和焦点理论的角度看>《语法研究和探索》十二 商务印书馆
- 朱德熙 1982《语法讲义》商务印书馆(2000)
- 张伯江·方梅 1995 <北京话指代三题>《吕叔湘先生九十华诞纪念文集》商务印书馆
- 赵艳芳 2001《认知语言学概论》上海外语教育出版社
- 高芑 2004『現代中国語指示代名詞“这”“那”に関する研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科 修士論文
- 佐藤信夫 2004『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 望月十八吉 1981『日本語と中国語』光生館
- 追田久美子 1993「日本語学習者と日本人児童による指示詞コ・ソ・アの習得研究一穴埋めテストの調査結果に基づいて一」広島大学教育学部紀要 第二部 第42号

用例の出典

《看》：王朔《看上去很美》、《雾》：巴金《雾雨电》、《虹》：茅盾《虹》、《多》：茅盾《多角关系》、《你》：刘索拉《你别无选择》、《我》朱文《我爱美元》、《零》：马原《零公里处》、《李》：赵树理《李家庄的变迁》、《难》：王蒙《难得明白》、《父》：梁晓声《父亲》、《四》：老舍《四世同堂》、《金》兰陵笑笑生《金瓶梅》、《儿》文康《儿女英雄传》